音楽科研究主題

自分の思いや意図を音で表現することができる力の育成

～聴く活動から感受し、表現する授業をとおして～

小林　美佳

１．テーマ設定の理由

現行の学習指導要領では、言語活動の充実が求められている。音楽科では、聴いたり歌ったりする活動よりも、話し合ったりワークシートに記入したりする時間が増え、音のない音楽の授業が展開されることが多くなった。確かに言語活動は重要であるが、音楽活動において音のない授業、音で表現しない授業はのぞましいとは言えない。生徒は曲を聴き、歌い、創作し楽器を演奏することで表現活動を行っている。言葉で表現する活動はその一助にすぎず、表現活動における補足的な役割だと考える。歌唱表現の工夫を発表し、「今回の工夫点はこの部分です」と伝えたり、お互いの演奏を聴いて「ここがよかった、もっとこうしたらよい」と評価したりすることは重要な言語活動である。

しかし、音楽科で求められているのは自分のもつ思いや意図を、「音楽をつかって」表現することができる力である。そこで本研究では、生徒がもつ思いや意図を、音で表現することのできる力を育成していきたいと考えている。それは歌唱であったり、器楽であったりさまざまな形態が考えられるが、自分自身の力で表現できるようになって、初めて心から音楽を楽しめるようになると考える。そして、生涯に渡って音楽に親しんでいく生徒を育てていきたい。

２．思いや意図を表現すること

音楽科における思いや意図とは、学習活動を進めていく中で生まれる「こんな作品をつくりたい」「こんなふうに表現したい」「感じ取ったことを伝えたい」などといった考えである。主に音楽表現の創意工夫の観点で評価され、思考・判断に大きく関わっている。

音楽活動を行う中で、思いや意図をもつことは必要不可欠である。授業に関わらず、普段生徒が接しているさまざまな音楽活動でも、思いや意図がなければ表現することはできない。吹奏楽で楽器を吹くときに「この旋律をやわらかく演奏したい」と考えること、合唱で「ソプラノが一番大きく聞こえるようにバランスを考えて歌いたい」と考えることなどである。しかし、思いや意図をもつためには生徒が「やってみたい」「自分にもできそうだ」と思えるような題材設定が必要である。ただ与えられて、やらされる課題には思いや意図は生まれにくい。適切な題材を提示し、生徒が自ら進んで挑戦しようとし、それを表現したいと思えて初めて、音楽活動が展開される。本研究では、生徒がもつ思いや意図を、生徒自身の力で表現できる力を育成することを目的として、授業を展開していく。

３．「聴く活動」の重要性

思いや意図を表現する力の育成に必要なことは何であろうか。本研究では、さまざまな場面での聴取活動、つまり「聴く活動」を重要視していきたい。「聴く活動」というと、まず思い浮かべるのが鑑賞領域での活動である。生徒は中学校の３年間で多くの作曲家の作品を鑑賞し、仕組みを学び、感じ取ったことを言葉で表現する。単に「きれいだった」と表現するのではなく、「ヴァイオリンの響きが豊かに聴こえてきれいだった」「強弱の表現がはっきりしていて迫力があった」など具体的な音楽の要素をもとにして、自分の考えを表現することが望まれる。

鑑賞活動に限らず、音楽の授業では「聴く活動」を行う場面が生徒の思考を促し、音楽表現の工夫につながることが多々見られる。例えば歌唱では、表現の工夫を考えるために、生徒は強弱や速度などの要素をもとにして試行錯誤する。そこに、生徒が思いもよらないような聴取教材を聴かせることで、「こんな表現もあるのか」と新たな発見をし、さらによりよい表現をもとめて工夫するようになる。創作では、身近な楽曲を聴いたり、ほかの生徒の作品を聴いたりすることで、自分にもできるかもしれないと思えたり、自分の作品を見直したりすることができる。「聴く活動」を効果的に仕組むことで、生徒の思いや意図は深まり、音楽活動はさらに充実すると考えられる。

また、それを表現するための力も「聴く活動」をとおして育成できると考える。さまざまな表現方法を聴き取ることで、表現の幅が広がるからである。お互いの演奏を聴き合うことも重要で、視覚的にも表現することの多様性を知ることができる。生徒が多くの表現方法を学び、それを自分の力で試し、実際に自分の思いや意図を表現することを目指していきたい。しかし、聴くだけで表現の技能が高まるわけではない。技術面の指導はこれまで同様、教師が主導し、全体に指導していくことも忘れてはならない。

４．全体研究との関わり

（１）「深く考える」授業について

①音楽科としての「深く考える」授業

音楽科の授業は、決まった解答があり、それを導き出すというより、感性を刺激し、よりよいものを目指して表現の幅を広げるような内容が多く見られる。「もっと曲に合った表現方法はないか」「よりよい旋律にするにはどうしたらよいか」などと、今の自分にはないもの、足りないものを求めて試行錯誤していく生徒の姿が見られるよう意識している。試行錯誤する過程には必ず自分の思いや意図が関わっており、それを表現するための経験を、さまざまな題材をとおして積むことが大切であると考えてきた。全体研究でいう、「自分なりの結論」に満足せず、さらにその先を求めることは、音楽科ではこれまでも自然に行ってきたと言える。人それぞれ違う感性をもつからこそ、自分の思いや意図を伝えたいと考え、どうしたらよいか試行錯誤する。よりよい表現を追い求め、自分の感性を広げていく授業が音楽科における「深く考える」授業であると捉えている。そしてそれは、音楽科が目標とする「自分の思いや意図を表現することのできる力の育成」にもつながっていくと考えている。

②題材設定と授業のつながり

「深く考える」授業を行うにあたり、生徒が「やってみたい、自分にもできる」と感じられるような題材を意図的に設定してきた。例えば昨年度の創作授業では、生徒の経験が少ない「変奏」に焦点を当てた。これまでの授業では、新しい旋律づくりを主に行ってきた。さらにそれを工夫することで、また違った曲ができあがる驚きや楽しさを感じてほしいと考え、授業を構成した。わずかに工夫するだけでも大きく変わる音楽に、素直な驚きの声をあげる生徒の姿をみることができた。

また、「物語をもとにして旋律をつくる」ことで、自分の思い描いた印象を音で表すという経験を積ませることができた。たった４拍の旋律がモチーフとなり、さまざまに変化することで、自分の思いや意図を表現することができる。自分の作品だけでなく、仲間の作品を聴くことで、音楽の表現が無限に広がっていくと考え、設定した。

また、創作を終えたあとの授業では、組曲『展覧会の絵』を鑑賞した。絵画をもとにつくられた色彩豊かな曲を聴き、その背景を知ることで、より音楽を深く味わい、楽しむことができたのではないかと感じている。自分たちも物語をもとにして創作することができたことから、作曲家を身近に感じ、改めて曲に施された工夫や、すばらしさなどを感じることができたのではないだろうか。生徒の感想の中には、「ムソルグスキーが、ガルトマンの絵を見て圧倒された様子が、曲の壮大さに表れていた」「きっとこの曲は、ムソルグスキーが親友に込めた尊敬や信頼の心を表現したかったのではないか」といった記述が見られた。そのほかにも、「私は、『スイミー』のモチーフをつくるだけでも苦労したが、ムソルグスキーは絵をもとにして、こんな曲を創ってしまうなんて本当にすごいと思う。」という記述も見られた。これは、自分が経験したからこそ実感できた感想であり、本実践の成果であると考える。

このように「深く考える」授業を行うためには、適切な題材設定を行い、さらに他の分野にもつなげていくことが効果的であると考えている。

（２）「視点を変える」活動について

①グループ活動と個人活動のバランス

全体研究を受けて、「深く考える」授業を実現させるための手立てとして、「視点を変える」活動を仕組んできた。音楽科の授業において、「視点を変える」活動として考えられることのひとつは、他者との交流である。これまでの研究内容を受けて、個人活動とグループ活動をバランスよく行うこと、グループ活動以外の交流活動についても検討することを目的に授業を組み立てた。昨年度の公開研究会の授業では個人活動を中心に行い、適宜グループ活動を取り入れることとした。具体的には、個人で創作活動を行う中で、仲間に途中経過を聴いてもらいアドバイスをもらったり、わからないことを確認したりする時間を設けた。その際、教師側からグループの設定は行わず、誰とでも自由に交流できるようにした。生徒は授業の中で、隣の友人にアドバイスをもらったり、交流しているところへ参加して３～４名でお互いの作品を聴きあったり、記譜の得意な仲間に楽譜を書いてもらったりと、自分で考えて行動し、得たものを作品に生かそうとしていた。個人活動の時間を保証することで、生徒は自分の思いや意図を表現するために、よりよい方法を求めて試行錯誤する。この過程を経ることで、その後に設定するグループ活動がより効果的に働くと考える。

自分の作品が完成したあとは、４人のグループをつくり、発表会を行った。これについては、意見交換しやすいよう教師側で人数や方法を設定し、一斉に行うこととした。お互いの作品を聴き合い、感想を述べ合うことで、さらに

学習が深まり、豊かな表現活動につながっていくと考えている。

②教師が与える視点

「視点を変える」活動としてはほかに、教師が意図的に視点を与えることで、生徒にゆさぶりをかけることが挙げられる。「変奏」を行うには、さまざまな音楽的観点をつかい、自分の思いや意図に近づけるよう工夫していくことが求められる。初めて変奏を行う生徒にとっては、何をどのようにつかえばよいのか検討もつかない場合が多い。そこで、教師が例として創作を実際に行い、段階的にいくつかの音楽的観点を提示していくこととした。教師の例示は、「何かが変わった」ことがすぐにわかるよう仕組み、生徒にゆさぶりをかけるように意識した。それを生徒に聴き取らせ、何が変わったのか、どう変わったのか考えさせることで、音楽的観点が効果的に働き、場面にあった旋律に変化していく様子を実感させた。生徒の感想には、「リズムや拍子が変わるだけで、こんなに曲の雰囲気が変わるのかと驚いた」「少しの変化で曲が大きく変わるのが面白い」などの記述が見られた。授業では聴取活動のあと、提示した観点のうち、どれか一つ以上をつかって変奏するように指示した。これまでの音楽経験により、個人差の大きい創作分野においては、誰もが自分の力で活動ができることを目標としている。リズムを一カ所変える、速度を変化させる、和音を取り入れるなど、生徒がそれぞれ自分に合った観点を選択できるよう工夫した。これらの観点を段階的に提示し、授業を行うごとに少しずつ表現の幅を広げていくことで、「よりよい旋律をつくる」ことにつなげていくことができたと考える。

５．これまでの研究のあゆみ

昨年度まで音楽科は、『音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力を育む～音楽を形づくっている要素をもとに，表現領域と鑑賞領域との関連を図った題材構成をとおして～』という主題のもと研究を行ってきた。

全体研究を受け、生徒が思いや意図をもって音楽表現を工夫したり，音楽を味わって聴いたりすることができる力を身に付けさせたいと考え実践を行った。これらの力を身に付けるためには，「どんな表現方法があるのだろうか」「この曲にはどんな工夫がされているのだろうか」などといった問いをもたせることが必要となる。そこで，生徒に感受させるもととなる聴取教材にこだわって，教材の工夫を行った。聴取教材は，比較的平易で親しみやすい旋律であること，多くのバリエーションがあることなどを条件とし，その時の題材にもっとも合うと思われるものを選曲した。

例えば，歌詞の内容から歌唱表現を工夫する授業では，生徒の予想に反するような表現の工夫をしている楽曲を選ぶことで，「どうしてこのような表現をしたのだろう」「この表現をすることでどんな効果があるのだろう」といった問いをもたせることにつながった。また，オブリガートの創作の授業では，もとの旋律にハーモニーをつけたもの，オブリガートをつけたものと変化していく楽曲を聴かせ，工夫を加えることで曲の雰囲気が大きく変わることを感じ取らせることができた。聴取教材の効果的な利用は，生徒が問いをもつきっかけとなり，その後の音楽活動に大きく影響することが実証できた。「どんな工夫がされているのか」を考えることで自分の作品を見直すことができ，聴取教材の工夫を真似したり，それを利用してさらに工夫を考えたりする姿が見られた。適切な教材によってきっかけをあたえることで，生徒の「やってみたい」「こんな作品にしたい」という意欲を向上させることにつながると考えられる。

また、効果的な聴取と同様に重要となるのが，教師の役割である。音楽科では，グループでの活動を取り入れることが多い。個人で考えたことを仲間と共有し，さらに高めていく過程が，音楽活動を深めるうえで効果的と考えられるからである。しかし，グループ活動を進めていくにあたり，教師がそれぞれのグループを巡回していると時間がかかりすぎ，生徒の活動が停滞してしまうという問題点もある。そこで，教師が適切な声かけを適切な時間に行うことが必要となる。巡回した中から授業のねらいに則した工夫を行っている生徒を取り出し，全体に経過を見せることで仲間の考えた工夫を知り，「自分はこうしたい」という意欲を高めていく。教師の声かけが生徒どうしの相互作用を促し，よりよい音楽活動を展開するきっかけとなると考えられる。

表現領域と鑑賞領域の関連を図ることは、生徒が音楽的な感受をもとに、思考・判断・表現する力を育てるうえで効果的な手だてだと言える。しかし、生徒が聴取教材から感受したことや、表現するために工夫したこと等を見とることについては、課題が残った。ワークシートの工夫や録音機器の利用など、生徒の見とりに関する手立てを今後も考えていきたい。

６．今年度の具体的な研究内容

今年度は、昨年度の成果と課題を踏まえ、さらに研究を深めていきたいと考えている。

今年度は全体研究の３年目となり、「視点を変える」活動の有効性を明らかにすることが求められている。これまで行ってきた授業を改めて見直し、「視点を変える」活動が生徒にどのような影響を与えたのか、それは「深く考える」授業を行ううえで効果的だったのか検証する必要がある。このことを検証する方法について、全体研究を受けて音楽科でも研究を進めていきたい。生徒の様子を詳しく知るためにも、ワークシートや映像・音声等での記録をさらに充実させるとともに、教師が活動中の生徒と多くコミュニケーションをとれるような工夫が必要ではないかと考えている。昨年度の研究では、個人活動を増やすことで、生徒一人ひとりと関われる時間がさらに限られてしまうという課題点があった。全体や個人に教師がそれぞれどのような投げかけを行うのかによって、生徒の活動の様子も大きく変わることから，個人活動等における教師の役割について研究を進めていきたい。

また、音楽科では生徒のもつ力の個人差が大きく、活動内容の進み方にも差が生まれている。これまでも、進度が遅れがちであったり、苦手意識が高かったりする生徒への支援方法が課題とされてきた。題材設定だけでなく、活動の方法を試行錯誤し、誰もが楽しんで音楽活動に取り組めるような授業を行っていきたい。これまでの個人活動、グループ活動のほか、ペアでの活動も仕組んでいきたいと考えている。

さらに、今年度は３年生の授業において「長唄」を題材として選択した。日本の伝統音楽による歌唱と器楽を関連づけた授業を仕組むことで、昨年度からの課題である、創作以外の分野においての実践事例を増やしていきたいと考えた。

６月～７月に４時間の授業を行い、外部講師を招聘し、実際に生徒とふれあいながら指導をしていただいた。生の音を聴き、真似をすることから始めることができるという点で、外部講師の影響の大きさを実感している。講師の指導を受けて生徒たちはいきいきと活動し、教師の予想を超える成長を見せてくれた。２年生で三味線の演奏を行ったときには、苦手意識をもつ生徒が多かったが、今回の授業をとおして改めて和楽器の楽しさを感じ、仲間と助け合いながら演奏に挑戦する姿が見られた。生徒の中に長唄の経験者がいなかったため、全員がほぼ同じスタートを切ることができた。これも個人差を減らし、いきいきと活動できた要因ではないだろうか。４人グループでの活動も、一人一人の意見が反映され、全員でつくりあげている実感がもてていたように感じた。今後は、ペア活動に移る予定であるが、これまでのグループ活動も生かし、よりよい音楽活動ができるよう仕組んでいきたい。また、今後も外部講師の招聘を計画している。指導者が増えることで、生徒に関わる時間も増え、より丁寧な指導ができると感じた。講師任せにならず、体験活動で終わることのない授業を目指していきたい。そのためには、教師自身の知識・技術の向上が不可欠である。効果的な聴取教材や、長唄独特の表現方法などについてさらに研究し、講師と綿密に打ち合わせを行いながら、授業内容の質の向上にも努めていきたい。

実際に授業を行い、評価の難しさも実感している。生徒には毎時間、自己の振り返りの時間を設けており、後で教師が見て評価できるよう、基本的にはワークシートに記述させている。しかし、授業の最後に記述の時間を設けると、最低でも５分はかかる。できれば、生徒同士で感想を言い合うなど、コミュニケーションをとる時間を確保したいところである。また、その場で自己の振り返りについて記述させなければ忘れてしまうなどの課題もある。授業のまとめや振り返りをどのように行うことが効果的であるかについては、今後も検討していく必要がある。

７．研究の実際（実践事例）

事前研究会（７／１）、中等教育研究会（10／１）に行った長唄の実践

第３学年音楽科学習指導案

指導者　小林　美佳

１．指導内容　Ａ表現（１）イ・ウ　（２）ア・イ　、〔共通事項〕（１）ア（音色・リズム・速度）

２．題材名　　日本の音楽を、唄と三味線で表現しよう

３．題材設定の理由

本題材では、長唄による歌唱と器楽を関連させた授業を展開していく。３年生はこれまでに、箏や三味線の実技や、歌舞伎の鑑賞、修学旅行での狂言鑑賞等を経験することで、日本の伝統音楽に触れてきた。生徒の興味や関心は高いが、言葉や楽器の奏法の難しさから、実際に自分たちで取り組むには敷居が高い印象がある。歌唱の活動においても、合唱活動には意欲的に取り組むことができるが、日本の声で歌うことについては、これまで経験がない。

そこで今回は、まず講師を招いて長唄の指導をお願いすることとした。基礎から学び、実際に体験することで、生徒に「自分たちにもできる」という実感をもたせていきたい。遠い昔の時代の音楽ではなく、身近にある音楽として日本の伝統音楽を感じ、より高い興味・関心を抱かせていきたいと考えた。

本題材では、唄と三味線の体験だけで終わることなく、楽曲にふさわしい表現の工夫ができることを目指している。そこで全７時間の授業構成とし、唄と三味線に触れ、基礎的な演奏ができるようになるまでを１期とし、自分たちで演奏しながら表現の工夫をするまでを２期とした。

１期は６月から７月にかけて４時間構成で行った。講師による指導を中心に唄と三味線に慣れ、長唄「供奴」を生徒それぞれが演奏できるようになることを目標とした。その中でも、練習のみで終わらないよう、表現の工夫を考える時間を仕組んだ。具体的には、４時間目の授業で歌詞の内容を確認し、意味を理解したうえでどのように歌うべきかを考えさせ、講師による模範演奏を参考に試行錯誤するように授業を構成した。これまで合唱等の授業をとおして学んできた表現方法を手がかりに、日本の声と楽器でも豊かな表現ができることを実感させていきたいと考えた。

これを受けて、２期の授業は３時間構成で行い、４人グループでの活動をもとにペアでの活動も取り入れることとした。２期では三味線よりも唄を重視し、発声などにもこだわって表現させていきたい。生徒は１期の授業をとおして、自分たちの演奏と講師の模範演奏の違いを感じ取っている。そして、より本物に近づきたいという意欲をもっている。そこで、１期よりもさらに「長唄らしさとは何か」について考えさせていきたい。日本の伝統音楽は、基本的に口伝である。だからこそ、人々の手によって現代まで受け継がれてきたとも言える。しかし、中学校の授業においてその全てを学ぶことは難しい。わずかな時間でも理解できるよう、日本の音楽の特徴や伝えたい内容を絞ることが必要である。講師の演奏を聴取し、発声や産字などの特徴的な表現方法を理解することで、「どのように演奏すれば長唄らしくなるのか」について試行錯誤し、演奏に生かすことができるのではないかと考えた。

本題材の学習をとおして、西洋の音楽とは違う、日本の音楽のよさや楽しさを実感させたい。そして、生涯にわたって伝統音楽に親しむことのできる生徒の育成を目指していきたい。

４．全体研究との関わりについて

全体研究では、生徒が「深く考える」ことのできる授業づくりを行う。

これを受けて音楽科では、「日本の声と楽器を用いて、楽曲の表現を工夫する活動」を仕組んでいく。音楽科における「深く考える」授業は、教科総論にあるとおりだが、今回の授業ではこれまでに経験のない日本の伝統音楽を取り上げ、さらに幅広い音楽活動を展開していきたいと考えている。生徒は合唱や鑑賞などの活動には意欲的に取り組むことができる。しかし、自分たちの身近に感じられないもの、経験が少ない分野には、抵抗感を示すことも多い。創作の活動はまさにそれに当たり、「できない」と思い込んで苦手意識をもっている様子が多く見られた。それに比べて箏や三味線の実技は、それほど身近ではなく、経験も少ないはずであるが、生徒の興味・関心が高い。これまでの音楽科の授業では、体験して終わることが多く、楽器の特性を生かして楽曲の表現を工夫することまでは取り組めてはいなかった。これまでに経験してきた、音楽の要素を用いた表現の工夫を生かし、日本の音楽を表現することにも楽しさを見いだしてほしいと考えている。

長唄の声の出し方、三味線の美しい音の出し方など、生徒がさまざまに試行錯誤し、よりよい表現を求めて活動できるよう仕組んでいきたい。

５．教材について

（１）教材

【歌唱・器楽教材】 ・長唄「供奴」　４世杵屋三郎助　作曲　／　２世瀬川如皐　作詞

（２）教材選択の理由

長唄の実践に当たり、生徒の実態に合った教材選択を心がけた。歌舞伎の鑑賞で用いられる「勧進帳」の長唄は、生徒にもわかりやすく、物語の一場面として情景も思い描くことができる。しかし、唄の実践のみならば、比較的やりやすいものの、三味線の手付を考えると難易度が高い。生徒は２年次に三味線を体験しているが、本調子の「さくら」をわずかに練習した程度である。箏の演奏に比べ、難易度が高いと感じる生徒も多かった。

しかし、三味線への興味・関心は高いことから、どの生徒にも挑戦できる楽曲を選択し、意欲をもたせたいと考えた。長唄「供奴」は、1828年に江戸中村座で初演された。旦那のお供に遅れた奴が、提灯を持って後を追いかける、という内容である。楽曲の冒頭部分を、今回の教材として使用する。唄と三味線がほぼ同じ動きをするため、比較的合わせやすい。しかし、リズミカルな曲であるほど手付は増えるため、唄よりも三味線の練習に時間がかかると思われる。そこで講師の協力により、手付を減らして難易度を下げた。また、生徒個人の技術にも差があることから、楽曲のどこまでを演奏するかも選択できるようにするなど、工夫を施している。

演奏だけにとらわれず、「こんなふうに歌ってみたい」「三味線でこんな様子を表したい」など生徒が長唄の魅力に気づき、意欲的に表現活動ができるようにしていきたい。

６．題材の目標

・長唄の声の特徴や言葉の特徴を理解し、それらを生かして歌うことができる。
・三味線の基礎的な奏法を生かして、表現を工夫することができる。
・楽曲の曲想を味わい、唄と三味線の特徴を生かして表現を工夫することができる。

７．題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
①長唄の発声や三味線の奏法などの特徴に関心をもち、聴取や演奏の活動に主体的に取り組もうとしている。 【観察・ワークシート】 ②長唄にふさわしい表現について理解し、工夫して演奏する活動に主体的に取り組んでいる。 【観察】	①長唄にふさわしい声や人物の言葉の特性を生かした音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて、思いや意図をもっている。 【観察・ワークシート】 ②長唄の発声や特徴的な奏法を聴き取り、それを生かしてどのように歌唱表現するかについて、思いや意図をもっている。 【観察・ワークシート】	①長唄の発声・節回し・拍節感などの特徴を知覚・感受し、それらを理解して歌唱する技能を身に付けている。 【観察、録音・ワークシート】 ②三味線の音色や特徴的な奏法を理解し、基礎的な奏法を生かして演奏している。 【観察、録音・ワークシート】 ③長唄の特徴を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて、歌唱で表現している。 【観察、録音・ワークシート】

８．指導計画と評価計画　※全７時間を１期（１～４時間目）と２期（５～７時間目）に分けて実施

ねらい	時	学習活動	評価規準	☆Ａと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援	備考
【１期】 長唄を聴取し、声や歌い方の特徴を感じ取り、三味線の扱いについて確認する。	１時間目	・長唄「供奴」を聴き、声の特徴やふしのつけ方などについて感じ取る。 ・長唄の特徴を理解する。 ・三味線の基本的な構えや奏法等を復習する。	関①長唄の特徴に関心をもち、聴取や演奏の活動に意欲的に取り組もうとしている。【観察・ワークシート】	☆講師の模範演奏を聴いて、普段の合唱とは違う発声や響きを感じ取り、理解してワークシートに記入している。 ■長唄の特徴が聴き取れない生徒には、普段の合唱と比べて何か違うところはないか、ヒントを出しながら聴かせる。	・学習形態 一斉
長唄の講師から、歌い方や発声について学び、歌唱する。	２時間目	・長唄の発声や姿勢などについて講師から指導を受ける。 ・西洋音楽とは違う、独特の節回し・拍節感などの特徴を感じ取る。 ・全体で試しながら歌唱する。 ・「供奴」の冒頭部分「仕て来いな～合点だ」について、講師から指導を受ける。	技①長唄の発声・節回し・拍節感などの特徴を知覚・感受し、それらを理解して歌唱する技能を身に付けている。【観察、録音・ワークシート】	☆講師の指導に従い、積極的に声を出して練習している。 ■積極的に声を出すことができない生徒には、教師が一緒に歌唱し、自信をつけさせる。	・学習形態 個人
長唄の歌唱練習を行う。また、講師から、三味線の奏法について学び、演奏する。	３時間目	・前時に練習した長唄の歌唱を復習する。 ・「供奴」の三味線の奏法について、講師から指導を受ける。「スクイ」の奏法に気を付けて演奏させる。手付が難しい部分は、部分的にカットするなど配慮する。 ・各自で三味線と唄をそれぞれ練習する。	技②三味線の特徴を理解し、基礎的な奏法を生かして演奏している。【観察、録音・ワークシート】	☆講師の指導に従い、楽器の練習を意欲的に行っている。 ■楽器の練習が進まない生徒には、速度をおとしたり、細かく区切ったりして、少しずつ練習して自信をつけさせる。	・学習形態 個人・ペア ・学習形態 個人
歌詞の意味を知って歌い方を考え、講師の三味線に合わせて、唄の部分を歌唱する。	４時間目	・三味線と唄の復習をする。 ・長唄「供奴」の内容を確認し、歌詞の意味を知ったうえで、演奏の仕方について考える。 ・工夫する場所を３か所指定し、そのうち１か所をまず工夫する。	創①長唄にふさわしい声や人物の言葉の特性を生かした音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて、思いや意図をもっている。【観察・ワークシート】	☆歌詞の意味を理解し、どのように演奏すればその場面の様子が伝わるかを考えながら、意欲的に活動している。 ■歌い方を考えられない生徒には、歌詞の意味を確認させ、どんな場面かを考えさせる。自分の考えを、まずは言葉で表現してか	・学習形態 個人 ・学習形態 グループ

		・グループで考えた工夫を演奏して全体で共有し、試す。		ら歌唱させる。	
【2期】２人ペアになり、それぞれ三味線と唄を練習する。	5時間目	・４人のグループで、三味線と唄をそれぞれ一緒に練習する。 ・４時間目までに練習してきたことを思い出し、感覚を取り戻す。 ・講師の先生と自分たちの演奏は何が違っているのか、どのようにしたら近づけるのかを考える。	関②長唄にふさわしい表現について理解し、工夫して演奏する活動に主体的に取り組んでいる。【観察】	☆グループでお互いにアドバイスしあいながら、何度も繰り返し練習している。 ■グループ活動がうまくいかない生徒には、速度をおとしたり、細かく区切ったりして少しずつ練習させる。	
より長唄らしい表現について理解し、演奏に生かす。	6時間目（本時）	・聴取活動を行い、「より長唄らしい表現」について感じ取る。 ・グループで、「より長唄らしい表現」になるよう、「供奴」の演奏の工夫について試行錯誤する。 ・工夫した点を生かしながら、グループ内でペアをつくり、練習する。 ・お互いに聴き合い、アドバイスをする。	創②長唄の発声や特徴的な奏法を聴き取り、それを生かしてどのように歌唱表現するかについて、思いや意図をもっている。【観察・ワークシート】	☆楽曲にふさわしい表現について、グループやペアで積極的に考え、試しながら試行錯誤している。 ■活動が進まない生徒には、講師の模範演奏を参考に、工夫できる場所を考えさせ、教師が一緒に歌唱する。	
三味線と唄それぞれの担当に分かれて、全体に発表する。	7時間目	・グループで最後まで演奏できるよう練習する。 ・唄と三味線の担当を決め、全体に発表する。 ・発表を聴いて感じたことを記入する。	技③長唄の特徴を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて、歌唱で表現している。【観察、録音・ワークシート】	☆自分たちの思いや意図を伝えながら、グループで協力して演奏することができる。 ■活動が進まない生徒には、教師が補助に入り、できるところまでを発表させる。	

９．本時の授業について

（1）日時　平成28年10月１日（土）10:00

（2）場所　山梨大学教育学部附属中学校　第１音楽室

（3）本時の目標：「より長唄らしい」と感じる表現の工夫を理解し、それをもとにグループで歌唱表現する。

（4）本時で期待する生徒の姿

１期の授業では、生徒たちは予想よりも早く唄や三味線を覚え、もっとうまく演奏したいという意欲をもって取り組んでいた。構想の段階では、講師による三味線の伴奏に生徒が唄をつけることを想定していたが、授業では、４人グループで助け合いながら、自分たちだけで演奏を楽しむ様子が見られた。まだ、演奏の表現にも教師が予想した以上のさまざまな工夫が見られた。いくつかの案をクラス全員で試すことで、さらに面白さを感じ、「もっとやってみ

たい」という意欲につながったと考えられる。本時は、これを受けた２期の授業である。１期に行った表現の工夫を踏まえ、「より長唄らしい表現」の工夫について試行錯誤する姿を期待する。４人グループで表現した４時間目をもとにして、講師による新たな聴取活動を経てさらに考えを深め、自分たちなりの表現を工夫してほしい。これまでは、生徒の自由な発想に任せていたが、本時では「本当にその表現でよいのだろうか」「もっと長唄らしい表現方法はないだろうか」とさらに考えを深め、演奏に生かす様子を期待したい。

（５）本時で期待する生徒の姿を引き出すための手立て

①「視点を変える」活動

本研究を進めるうえで重視する活動として挙げられているのが、「視点を変える」活動である。

本題材では、１期２期をとおして他者との交流を行うことで、生徒に「視点を変える」機会を与えていきたいと考えている。１期の授業では、４人グループで唄の表現方法について試行錯誤した。自分の考えた工夫が、実際に歌唱できるものか、歌唱することで歌詞の意味が伝わるか、などをグループのメンバーと交流することで考えさせた。また、いくつかのグループの考えた工夫を全体で共有し、実際に三味線に合わせて歌唱することで、「もっとこうしたい」「こんな表現もできるのではないか」など生徒がよりよい表現を求めて活動できるように仕組んできた。

２期ではペアの活動も取り入れるが、４人グループは常に近くで活動するように仕組み、お互いに助け合い、学び合う環境を整えていきたい。また、交流だけでなく、新たな聴取活動を取り入れることで、生徒の知識や経験を増やし、表現活動に生かせるよう仕組んでいきたい。

②「視点を変える」活動を効果的にする教師の働きかけ

音楽科の授業では、教師が新たな視点を与えることで、生徒の思考を促すことも多い。１期の授業では、講師による模範演奏や指導を行った。これまでＣＤやＤＶＤでしか聴いていなかった長唄について、講師による演奏を実際に聴くことで、発声や歌い方の工夫、響きなどについて感じ取り、「あんなふうに演奏したい」という意欲につながった。２期では、長唄の特徴を理解するための比較聴取を取り入れることで、生徒に新しい視点を与えられるのではないかと考えている。

③「深く考える」授業のための題材、教材、学習課題

題材設定や教材選択の理由については前述したとおりである。それを受けて、本時では「より長唄らしい」と感じる表現の工夫を理解し、それをもとにグループで歌唱表現することを学習課題とした。自分たちが普段歌っている合唱などの歌と、長唄では何が違うのか、どうしたら長唄らしい演奏ができるのかについて、考えさせていく。１期の授業では、自由に表現することの楽しさを感じることができたが、より本物に近づきたいと思う生徒も多く見られた。これまであまり指導しなかった発声や、産字などの専門的な知識を与えることで、生徒の意欲をさらに高めていきたいと考えている。

（６）展開

過程	学習のねらいと学習活動	教師の指導・支援	評価・備考
導入 （５分）	１．全体で、「供奴」を一度演奏する。 ・本時の内容を知る。	・講師には、前時までの注意事項について、改めて確認していただく。 ・ここでは前回までに考えた表現は反映させず、全体で同じように合わせる。	・学習形態　一斉
展開 (40分)	２．　講師の演奏を聴き、長唄の表現の工夫について感じ取る。 ・「長唄らしさ」とはどんなことなのか、今の自分たちの考えをクラスで共有する。 ・長唄の特徴をなくした場合と、入れた場合とでは何が違うのかを比較する。 ・「供奴」の地合以外の部分を演奏していただき、聴き取った特徴をワークシートに記入する。	・最初は言葉をあえて拍にはめて平坦にし、産字などの特徴をなくした形で、唄っていただく。産字などが入ることで、長唄らしくなることを聴き取らせる。 ・ワークシートに、違いを書き込ませ、どんな工夫がされていたのか整理させる。	・学習形態　一斉 ・ｉＰａｄとプロジェクターの準備

	３．聴き取った特徴的な表現について、練習する。 ・講師の実技指導を受け、産字や発声について練習する。 ・グループのメンバーだけでも、唄えるように練習する。	・１期でも同様の指導は行っているが、今回は発声についても講師からご指導いただく。ただし、わずかな時間ですぐにできるわけではないため、発声のポイントを意識して唄うことを確認する。	
	４．グループになり、講師の演奏を参考に、「より長唄らしい表現」を求めて練習する。 ・グループで、どの部分を特に工夫するのか考え、ホワイトボードに記入する。 ・４人グループを２人ずつのペアに分け、それぞれで唄い方について試行錯誤する。 ・ある程度唄えるようになったら４人に戻り、お互いに聴きあう。三味線は聴いている人が演奏してもよい。 ・「長唄らしく」唄えているかについて、アドバイスしあい、４人で唄う練習をする。	・グループごとに１枚、拡大したシートを配付し、産字を入れる場所などを記入させる。 ・講師には各グループを回っていただき、三味線演奏の補助や、表現への助言をお願いする。 ・必要に応じて、全体で共有する時間を設定する。その場合、各グループのシートは拡大してスクリーンに映し、全体で見られるようにする。 ・講師には、全体に合図を出していただき、実技指導をお願いする。	・学習形態ペア・グループ 創②長唄の発声や特徴的な奏法を聴き取り、それを生かしてどのように歌唱表現するかについて、思いや意図をもっている。【観察・ワークシート】 ・ホワイトボードの準備
まとめ （５分）	５．活動の振り返りと、次回の内容の確認。 ・自己評価をワークシートに記入する。 ・今日の授業について感じたことなどを意見交換する。	・講師から講評をいただく。 ・次回は仕上げとして、全体で発表を行うことを知らせる。	・学習形態　一斉

８．研究のまとめ

（１）今年度の実践を振り返って

今年度の授業実践では、これまでとは違う分野に挑戦することができた。今回取り組んだ「長唄」は、進め方次第で歌唱と器楽どちらの分野も学ぶことができる。長唄の学習をきっかけに日本の伝統音楽のよさに触れ、これまで経験したことのない発声や和楽器の奏法を学ぶことで、生徒の感性が刺激され、より音楽への興味・関心が増すのではないだろうか。

講師の伴奏で唄の練習

７月の研究会を受けて、10月の授業では「より長唄らしい表現」をキーワードに授業を構成した。この授業を仕組むにあたり、最も懸念したことは発声である。講師の模範演奏のような表現を目指すには、これまでよりもより本格的な発声を学び、生徒がそれを身につけなければならない。しかし、本格的な長唄の発声法を、わずか数時間の中学校の授業で習得することはできない。そこで、講師と相談し、普段は行わないという発声練習の方法を考えていただくことになった。お稽古としての長唄ではなく、授業で学ぶための長唄の教材をつくることが最善であると考えた。

この発声練習は、授業の中でも効果的であったと言える。難しい練習ではないため、生徒も恥ずかしがらず楽しみながら発声を学ぶことができた。もともと「講師の先生のような声を出したい」と感じていた生徒たちが多かったため、この練習を経て、生徒の発声技術は格段に向上した。誰もが達成できる基礎的な課題を設定し、「自分にもできる」「もっとやってみたい」という意欲をもたせることが重要であると実感した。

研究会の中でも、生徒が発声法を素直に受け入れ、自分たちの表現に生かそうと試行錯誤する様子が見られたという意見をいただいた。本物（講師の模範演奏）を目の当たりにしたことで、生徒の自主的な学びが行われ、さらに意

伴奏と唄に分かれて演奏練習

欲を高めることにつながった。また、「どんな表現でもよい」ではなく「より○○らしい表現」にこだわったことで、生徒は自分なりに試行錯誤し、「音楽を表現すること」を楽しみながらも真剣に向き合うことができたのだと考える。これは、パターン化してきた歌唱表現の授業を、一歩先に進めることにつながるのではないだろうか。伝統音楽の歌唱は、我々指導者が学んできていない分野でもあり、授業に取り入れることは難しい。しかし、外部講師を招き、綿密な打ち合わせのもとに授業を行うことで、苦手意識をもつことなく内容の濃い授業が仕組めると感じた。生徒とともに教師も学び、それがよりよい音楽の授業づくりにつながっていけばよいと考えている。

要である。今回の授業では、２年生のときに三味線の基礎を学んでいたことで、すんなりと長唄の実践に入っていくことができた。和楽器や伝統音楽の学習を１年生の時からどう積み重ねていくかについても、熟考していくべきである。これは、他の分野でも言えることである。

10月の研究会には、多くの小学校・高校の先生方にご参加いただいた。先生方から、小学校でできること、高校ですべきことも共有し、異校種での積極的な情報交換・授業参観等が必要であるというご意見があった。例えば小学校の先生からは、今回行った表現の工夫も、グループではなく個人で行ったほうがよいのではないか、という意見もあった。しかし、中学校の発達段階において、個人で積極的に声を出し、仲間の前で表現活動を行うことは、なかなか難しい。もちろん個人活動が必要な場面はあるので、グループ活動とのバランスを、今後も研究していきたいと考えている。さまざまな機会をとおして、異校種の授業も学び、さらに授業の質を高めていきたい。

（２）「深く考える」授業について

これまで３年間行ってきた全体研究を受け、音楽科でも「深く考える」授業についてさまざまな実践を積み重ねてきた。１年目・２年目は主に創作の分野で、そして３年目は歌唱と器楽の分野で授業を構成した。３年間実践して感じたことは、「視点を変える」活動の有効性である。特に音楽科では「教師から与える視点」が重要であると考える。

音楽の授業では、他者との交流はこれまでも当たり前に行われてきた。グループ活動でも、個人活動でも、最終的には表現することが必要とされる教科である。何かしらの形で、人に伝えることが必要となる。他者の演奏を聴いて感じたことが、自分の演奏に生かされたり、意見をもらうことで、新たな可能性に気づいたりと、大きな効果を得ることができる。しかし、生徒同士の意見交換では、音楽で交流することよりも話すことに重点が置かれてしまう。また、求められた意見がどうしても的を外れてしまったり、なかなか意見が出なかったりすることもある。

その点、教師から視点を与える場合には、ねらいに則した内容を提示することができる。例えば、昨年度の創作の授業では、創作につかえる音楽的観点を少しずつ与えていく、という方法をとった。そのたびに教師が見本を提示し、生徒が興味・関心をもてるよう工夫した。新たな視点が加わることで、音楽の世界が広がり、生徒の意欲も増していく。何とかして新しい観点をつかってみようという生徒の思いが、作品にも表れ、ワークシートの記述からも見てとれた。

今回の長唄の授業でも、講師から模範が示されることで、生徒は「長唄らしさ」とは何かを考え、自分たちとの違いに気づき、それを表現に生かそうと試行錯誤していた。まさに、音楽科が目指す「自分の思いや意図を音で表現する」ことを実践しようとしていた。教師から適切な視点を与え、生徒の活動を促すことで、「深く考える」授業となっていくのではないだろうか。生徒が楽しみながらも、試行錯誤を繰り返す様子は、「深く考える」ことができている状態であったと考えられる。見とりに関してなど、まだ課題はあるが、これからも生徒が生き生きと活動できる授業を構成し、実践していきたい。

仲間とともに課題を楽しむ

〈引用・参考文献〉

・中学校学習指導要領解説　音楽編　　文部科学省
・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校　音楽）
H23　国立教育政策研究所　教育課程研究センター
・山梨大学教育人間科学部附属中学校研究紀要　H23～25
・「教えて考えさせる音楽の授業」　内田有一著　2014
・これからの中学校音楽ここがポイント　　山本文茂監修　2011
・よくわかる日本音楽基礎講座　雅楽から民謡まで　福井照史著　2006